

三重県鳥羽八代神社の神宝

三重県鳥羽市の海上約17km、伊勢湾上に浮かぶ神島八代神社には、金銅製紡織具を始めとする神宝類がある(大西源一 1955)。神宝は一義的には神自身の使用を目的(御料)として進る品々のことであるが、宝物として進る品々をいうこともある。1960年代には中日新聞社主催の総合学術調査、文化財保護委員会美術工芸課(現文化庁美術学芸課)等の調査があり、神宝類は島北東の裏側にある高い崖の下の狭い砂浜から採集したもので(文化財保護委員会1962)、八代社社殿成立後に神宝として収納し、経塚発見品等を加え今の姿になったようである。

神宝の性格をめぐっては諸説がある。亀井説は神島が渥美半島と志摩を結ぶ伊勢湾の要衝にあることに着目し、航海安全を祈願して神島の神に奉獻したとする(亀井正道 1965)。海島祭祀説である。神宝は古墳期から中世におよぶ。海島祭祀の時代的变化を考えた和田説は、古墳期は大和朝廷の「東征」に関わり、律令期は伊勢湾周辺の海土集団が安全祈願のために奉獻したとした。神宝(現重文)の全貌が図面や写真などで明らかでないため、近年は過大評価の傾向が目立つ(三村翰弘 2002)。

しかし、仔細に見るなら各時代の少数品の集まりで、希有な紡織具も国家的祭祀ではなく伊勢神宮との関わりで理解すべきと思う。以下1976~77年の神宝調査をもとに述べる。この調査は佐藤興二氏、西弘海氏、井上直夫氏等と共にこなしたもので、小久保島雄宮司(当時)の

表5 八代神社神宝の時代別内訳

古墳時代の遺物	
鏡鑑類	画文帯神獸鏡1、四神二獸鏡1、
金属器	頭椎大刀2、大刀金具1、
土器類	須恵器坏身1
8・9世紀代の遺物	
鏡鑑類	伯牙弹琴鏡1、海獸葡萄鏡1、小型海獸葡萄鏡6、花卉双蝶八花鏡1
	素文小鏡5等小鏡計21面
金属器	金銅製帯金具(巡方)2、青銅鈴1、金銅製瑞1、金銅製埴2、
	ミニチュア銅鏡1、銅製鏡板(F字型)1対
土器類	奈良三彩小壺1
10世紀以降の遺物	
鏡鑑類	瑞花双鸞五花鏡1、瑞花双鸞五花鏡1、瑞花五花鏡1等計73面
金属器	鍍金鉄鍬形台1、青銅鈴1、鉄鈴1、経筒蓋1、
土器類	緑釉壺1、施釉注口壺1、青白磁合子1、灰釉有蓋壺1、灰釉片口1、灰釉子持高坏2

厚誼により神宝の実測と写真撮影をおこなった。

神宝は紡織具、帯金具、陶磁器、和鏡類があり、古墳時代の6世紀、8・9世紀代、平安後期以降に大別できる(表5)。ここでは金銅製紡織具を中心に述べる。

紡織具は織成する糸を調える製糸工程用の櫛^{たたり}1基、杵^{かせ}2基があり、ともに鍍銅鍍金製品である。櫛は支柱と土居を別作りとする組立式であり、支柱頭部は4つに分岐(四分岐)し、支柱片側には耳状突起を造る。高さは19.3cm、基部の土居は方7cmである。櫛頭部の分岐には苧麻の一端を懸けて爪で細く割り裂き、支柱片側の耳状の突起は「麻をかけ、爪で麻を裂くときに、適宜の制縛を加えるために、耳部で紐をもって軽く縛った」(太田英蔵 1975)。細かく裂いた繊維は麻筥に蓄え、紡輪で撚りかけける。杵は撚りかけた麻糸を繰る工字形の道具であり、糸の量を示す単位ともなる。2種があり、支柱中央の握部の造りなどに違いがある。1は支柱に稜角をつけ握り部を細身に造る。全長22.3cm、最大幅14cm。2は支柱全体を同径とする。断面はほぼ円形。全長16cm、最大幅8.8

表4 史料および神宝に見える紡織具

伊勢神宮神宝	金銅櫛2基、麻筥2合、金銅加世比2枚、縛2枚 銀銅櫛1基、麻筥1合、銀銅加世比2枚、縛1枚	延暦23(804)年8月28日『皇太神宮儀式帳』群書類従巻1
伊勢別宮・滝原宮	銀桶1口、銀杵1枚	『皇太神宮儀式帳』
伊勢別宮・伊雑宮	金桶2口、金杵1枝、金高機1具	『皇太神宮儀式帳』
伊勢別宮・風宮	金銅櫛、金銅杵、桶、高機	「嘉元2(1304)年送官符」
龍田社風神祭	金櫛、金杵、金麻筥、	「龍田風神祭祀祝詞」延喜式巻8
住吉大社	金銅櫛、金銅杵、麻筥、杼頭	「天平3年7月5日付住吉大社司解」『平安遺文補1』
香取神宮	金銅櫛、? 保元3(1158)年	「下総国香取社遷宮造進注文事」続群書類従巻70
春日大社	金銅櫛(線柱)、麻筥	『弘安9(1286)年勘仲記3月27日神宝送文』
日枝大社	金銅櫛(線柱)、麻筥	『元享2(1322)年日吉大社遷宮神宝等選文』
賀茂神社	金銅櫛(線柱)、麻筥	『執政所抄下』
熊野速玉大社	金銅杵、縛、苧筥	太田英蔵1967「紡織具と調庸布施」『日本考古学6』

(吉村元雄「古神宝」1975『仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書』第2冊をもとに補訂)

史料:『令集解』神祇巻二の注には、即位した天皇が天神地祇の總祭において伊勢神宮に大幣として、「金水桶、金線柱」を住吉神の櫛戈とともに奉るとする。伊勢神宮の神宝に関しては『続日本紀』天平10(739)年5月24日条に、「右大臣正三位橘宿禰諸兄、神祇伯從四位下中臣朝臣名代、右少弁從五位下紀朝臣宇美、陰陽頭外從五位下高妻太を以て、神宝をもちて伊勢大神宮に奉らしむ」と、神宝を奉る記事がある。

cmである。杵からみて櫛も2型式あった可能性がある。

金銅製の紡織具を神宝として進ること、あるいは祭祀具とすることは伊勢神宮と天照大神に関わると思う。この点を考古資料と史料からみよう。金銅製紡織具は福岡県沖の島遺跡と伊勢神宮および末社の神宝類にある。(表4・6)。沖の島遺跡は福岡県宗像郡玄海町の沖合57kmの玄界灘に浮かぶ沖の島にある。宗像三女神(田心姫、湍津姫、市杵嶋姫)を祭る宗像社は本社が田島の辺津宮、中津宮が北の大島にあり、沖の島には沖津宮がある。

沖の島南端の巨岩地帯には古墳時代から中世の祭祀遺跡群があり、八代社の櫛に酷似する伝出土品の他、金銅薄板製の紡織具が6・22・5・1号の各遺跡にある(表6)。

神話によると宗像三女神は天照大神と須佐之男命との誓約によって生まれた(書紀上瑞珠盟約第六段第三書、井上光貞1977)。天照大神を祭る伊勢神宮では神宝21種中(804・延暦23年8月『皇太神宮儀式帳』では19種)に金銅・銀銅櫛、金銅・銀銅加世比(埜)、麻笥、罽の4種があり、別宮にも麻笥・杵等がある(表4)。天照大神に紡織具を進る目的は神衣の調進に替えて、女神が自ら織ることを願うためという。

史料ではさらに龍田風神祭祀詞、住吉大社(「天平3年7月5日付住吉大社司解」)等にもみる(表4)。うち8世紀代に遡るのは龍田風神と住吉社である。住吉大社司解に関連した「住吉大社神代記」は元慶年間(877-885年)以後に下るが、住吉三神(底筒男命・中筒男命・表筒男命)と天照大神とは書紀神代上第六段では密接な関わりがある。他方の龍田風神祭との関わりはなお課題である。

このように未解決の問題もあるが、令制下の金銅製紡織具は天照大神(伊勢神宮)をもとに解釈すべきと思う。

この観点からすると、八代社神宝と伊勢神宮を媒介するのは神衣祭であろう。神衣祭は毎年4月と9月に、神衣を伊勢大神と荒祭宮に進り、この祭では駿河国が調進する「赤引糸」が中心になる。清原夏野等撰『令義解』(天長10・833年成立)には、「此の神服部等、斎戒潔清して駿河の赤引の神調の糸をもって神衣を織作し、また麻績連等、麻を績みてもって敷和の衣を織り、もって神明に供ふ、故に神衣といふ」とあり、駿河国が献じた赤引糸による神衣を大神と荒祭宮に進る定めである。駿河から伊勢への最短距離は、伊良湖岬と伊勢を結ぶ伊良湖水道を横切ること。この海道は潮が速い難所というが、5世

表6 金銅製紡織具模造品の類例

三重県鳥羽市神島八代神社	金銅櫛 1、杵 2、櫛は基部土居に支柱 櫛高19.3cm。杵 1)22.3cm、杵 2)16cm
福岡県玄海町宗像社沖ノ島	
段階 6号遺跡	金銅麻笥、勝?杵?
22号遺跡	金銅櫛、刀杼、勝、反転
段階 5号遺跡	金銅櫛(2種)、刀杼、麻笥
段階 1号遺跡	金銅櫛、金銅杵、麻笥、紡錘、 杼頭、反転、勝
伝承沖の島遺跡	金銅櫛(支柱の一部現存高14.8cm)
福岡県玄海町宗像社辺津宮	金銅製高機
沖の島遺跡:第三次沖ノ島学術調査隊1979『宗像沖ノ島』宗像大社	

紀代には成立していた(澄田正一 1963)。神島は伊良湖水道上の孤島であり、八代神社の紡織具はこの観点からみるべきと思う。(金子裕之)

参考文献

井上光貞1977「古代沖ノ島の祭祀」『日本古代の王権と祭祀』pp.207-245。大西源一1955「志摩国神島八代神社の古神宝」『國學院雑誌』56巻2号。太田英蔵1972「沖の島遺跡の紡織具」『海の正倉院 沖ノ島遺跡』、毎日新聞社。亀井正道1965「志摩八代神社神宝の意義」『石田博士頌壽記念東洋史論叢』pp.177-194。澄田正一1963「伊勢湾沿岸の画文帯神獸鏡について」『近畿古文化論叢』吉川弘文館、pp.185-198。文化財保護委員会1962『神宮を中心にした文化財』p.154。三村翰弘2002「伊勢齋宮の立地に関する考察-「神島」古代祭司との関連を中心に-」『筑波大学芸術研究報』22。和田萃1995「東国への海つ路」『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』下巻、pp.317-355。

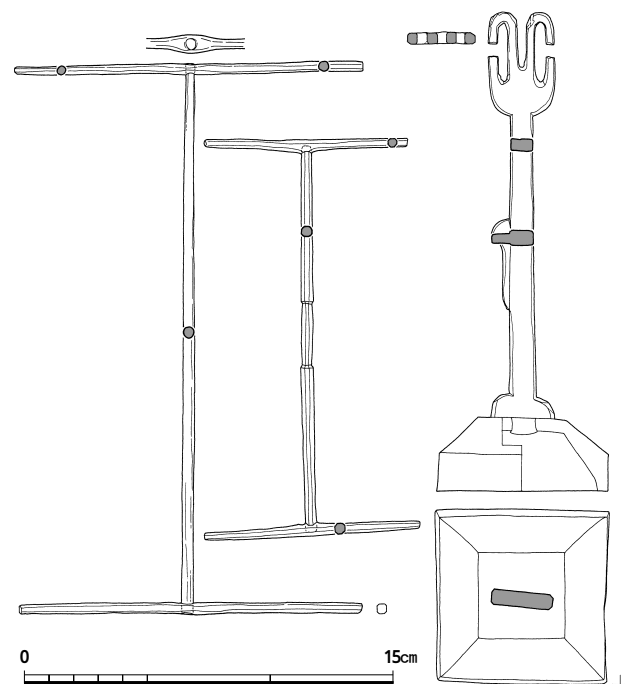


図83 三重県鳥羽市八代神社の神宝